

徳島周辺の古代遺跡

『卑弥呼の居城!』探訪記

阿波邪馬台国説を観る!

25-Oct-2008 Gainendesign Labo. Taizan

586 Takakura Fujisawa-shi Kanagawa-ken Japan 252-0802 Tel/Fax 0466-43-4713 Email <u>taizan@gainendesign.com</u> HP <u>http://www.gainendesign.com/</u> 『古代のミステリーの中で常にスポットライトが当るのは邪馬台国と卑弥呼だろう。邪馬台国論争の主な舞台は北九州と近畿ではあるが、実はもうひとつの邪馬台国説がある。四国の阿波邪馬台国説がそれだ。近年徳島県から奈良県の箸墓古墳より古い大規模古墳が発見されており、古墳群の数も夥しい。徳島を中心に古代に何らかの王権が存在していたことは学術的にも認められているところである。そして魏志倭人伝が伝える邪馬台国の場所が論理的に見て、十佐か徳島に比定できることも確かなのだ。

そんなことから最近にわかに取り上げられた場所がある。それが卑弥呼の山城と言われる高根悲願寺と卑弥呼の古墳ではないかと推測された天石 門別八倉比売神社の五角形の石積み遺構;天乃真名井である。悲願寺には常夜塔や十二社神社がある。

八倉比売神社の由緒書きには…「御祭神大日霊女;御神格正一位;延喜式内名神大社」とあり、この神社が極めて古い創建で、格式も非常に高いものであることが分かる。だから、この五角形の石積みが陵墓だとすれば、石積みの下にはきっと王か女王クラスの高貴な人物が埋葬されていることになる。神社の裏手は直径が数十mの小高いマウンドになっていて、明らかに円墳形態。また阿波史跡公園を含む山全体を見れば巨大な前方後円墳とみることもできる。五角形の石積みとはまた独特な様相であるが、少なくとも山全体に貴人のオーラを感じたことは事実なのである。』
←本テキストは三推社のアウトドア雑誌;FENEK2008年11月号に寄稿したもの。

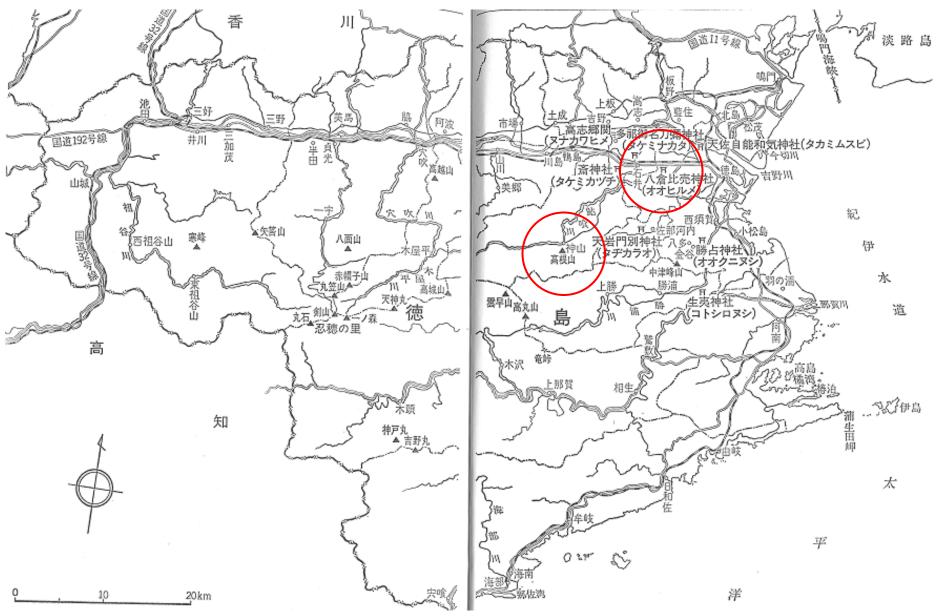
2008年3月末、阿波邪馬台国説の魅力に惹かれて、四国という大結界の深奥へと迫ってみた。

天石門別八倉比売神社(あまのいわとわけやくらひめじんじゃ) 所在地 徳島県徳島市国府町矢野531 国道192から気延山の東麓を西へ阿波史跡公園に向かう。

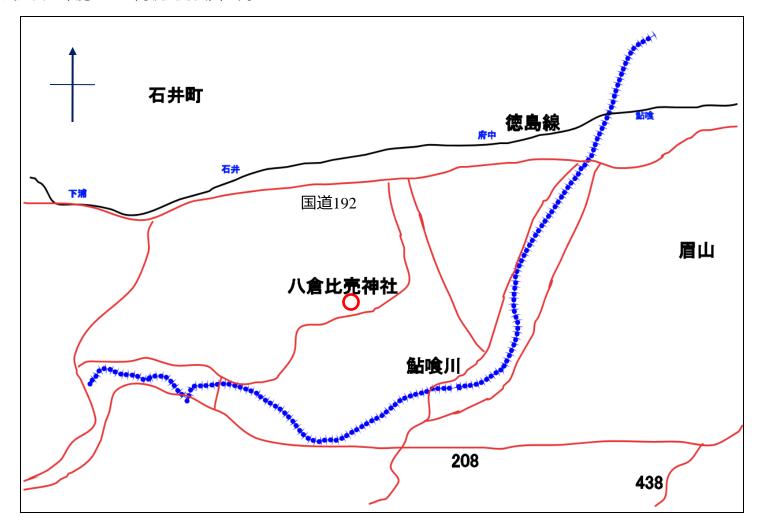
高根悲願寺(こうねひがんじ) 所在地 徳島県名西郡神山町神領字高根 国道438を寄井から南下、雨乞の滝方面へ向かう。

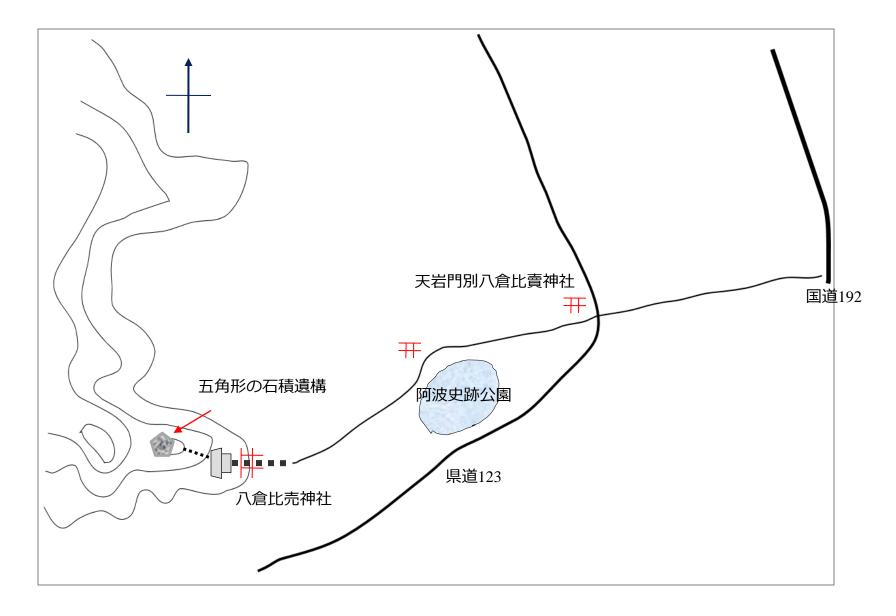
阿波邪馬台国説…発端は郷土史家の郡昇氏による『阿波高天原考』(1975年)。1976年に新人物往来社より古代阿波研究会が『邪馬壱国は阿波だった - 魏志倭人伝と古事記との一致 - 』を発表。阿波(現在の徳島を中心にしたところ)に邪馬台国が存在し、卑弥呼も阿波に居住したという説。学会的には"異説"とされるが、魏志倭人伝とのデータ的な一致や、徳島に近年発見された大古墳群などからして、堂々たる説ではある。1977年には日本テレビの山中康男氏によって『高天原は阿波だった』が講談社から出版されている。このほか邪馬台国四国説を唱える人には、「土佐説」の北岡南氏、土佐文雄氏、樫谷義広氏、「四国山上説」の大杉博氏らがいる。

地図の出典:山中康男氏『高天原は阿波だった』(講談社1977)赤丸印が今回の探訪地である高根山悲願寺と八倉比売神社



天石門別八倉比売神社(あまのいわとわけやくらひめじんじゃ) 所在地 徳島県徳島市国府町矢野 5 3 1 国道192から気延山の東麓を西へ阿波史跡公園に向かう。

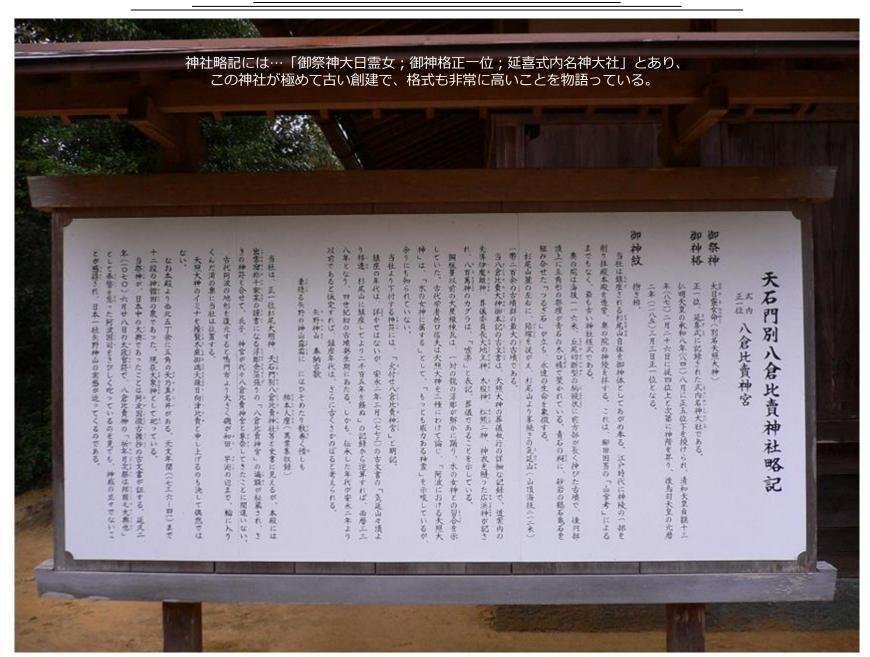




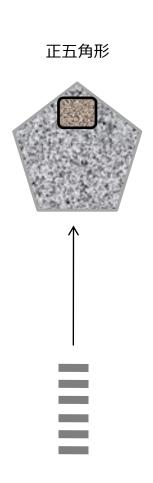


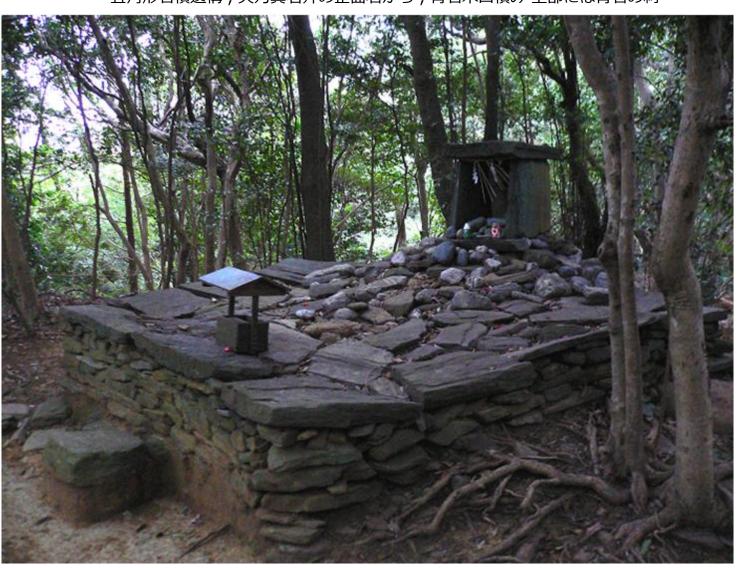
八倉比売神社参道の急階段
ハ倉比売神社拝殿

八倉比売神社本殿



五角形石積遺構;天乃真名井の正面右から;青石木口積み-上部には青石の祠





五角形石積遺構の背面





五角形の石積遺構に向かう階段

青石の祠の中に"鶴・亀のツルギ石"を祀る

五角形の石積遺構そばの異形の古木

淡路島を抜けて徳島に入り、最近TVなどでとみに紹介されるようになった天石門別八倉比売神社を訪ねた。 阿波邪馬台国説の中核をなす『卑弥呼の陵墓』というのが、この天石門別八倉比売神社にある五角形の石積遺構であるというのだ。

ここを訪ねる前にいくつか徳島のポイントを回っていた私には、徳島が独特の何かを隠し持っているという感覚があった。前年から滋賀、京都、大阪、奈良、 三重、愛知、和歌山を巡り、一通りの洗礼を受けた後に待っていたのが四国であった。

和歌山県の紀ノ川とシンメトリックに西に吉野川が四国を走る。天皇家をいまでも裏側から支える忌部一族がいる四国の深奥。近年日本で最大の古墳群が確認された徳島…その入口(東端)に天石門別八倉比売神社はある。

「卑弥呼のお墓!」…などというキャッチコピーが独り歩きして天石門別八倉比売神社をややミーハーな対象であると思わせる風潮があることも否めない事実であろう。だから勢い、五角形の石積などと喧伝されるとよけいに娯楽番組的になってしまう。

やはり現場に浸って、体で十分に感じてからいろいろと思考を巡らすのが良い。今回も「現場に行ってよかった」…というのが本音だ。訪ねる前と後とでは かなり印象が違ったのである。

天石門別八倉比売神社は気延山という小高い山の頂上付近にある神社で、これはあくまでも感覚的な話ではあるが神社にクルマで近づくにつれて、山全体が 巨大古墳にも見えてきた。その一角のマウンドに天石門別八倉比売神社の五角形の石積み遺構があるのだ。

たとえて言うならば、前方後円墳の円墳頂上部分に五角形の遺構があり、それが天石門別八倉比売神社の御神体のように祀られているという具合なのである。 神社略記には杉尾山全体が御神体山であり、峰続きの気延山一帯には200以上の古墳群が存在し、その中の最大のものが当該マウンドであると記されている。

五角形の「五」に関してはいろいろな思索が巡るわけであるが、同じ四国探訪で立ち寄った白人神社に隣接する神明神社の「五社三門」の"五"が一番近しいような気がする。それは五社三門の石積遺構が同様に「平板状の石の木口積み」であり、比較すれば「同じ作品」であると実感できるからだ。

五社三門の遺構について近年TVで古代イスラエルの祭壇に酷似していると報じられ、実際に駐日イスラエル大使もかの地へ足を運んでいるということである。 そこで連想されるのが…「古代イスラエルに絡む五芒星」の"五"である。 初代全イスラエル王ダビデの紋章がいわゆる籠目紋の六芒星(現在のイスラエルの国旗にもある) 後継者のソロモン王の紋章が桔梗紋の五芒星といわれている。



←神明神社5社三門の平石木口積み 2008年3月撮影

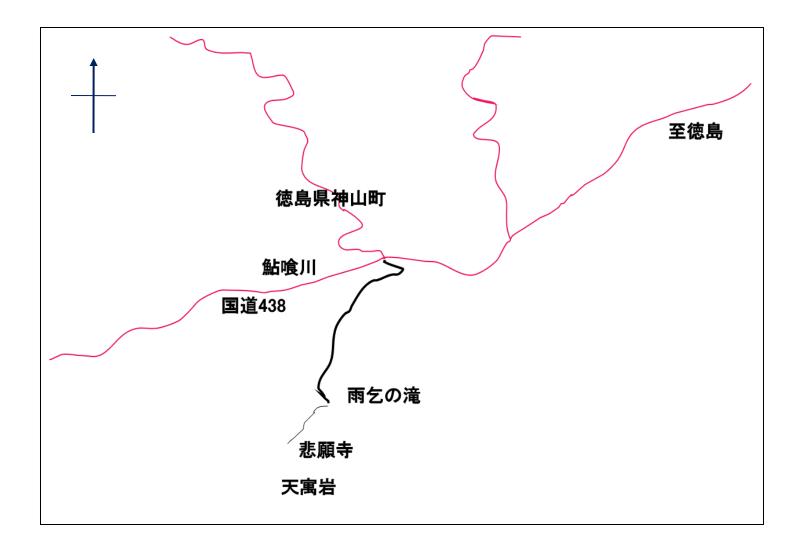
最近、「平家のルーツはペルシャではないか」…という興味深い仮説が出てきているが、あながち荒唐無稽と一蹴できない。平氏の公達(きんだち;サムライ)は美男・長身であったという伝聞もあるということなので、可能性として捨てきれない。小生としては古代にかなり頻繁、迅速、大量に人・モノ・情報の国際交流があったと最近判断しているので(別の機会に論じてみたいが…)、古代において天皇制が確立される7世紀以前の日本にも十分な人材と情報の流入があったと考えられるから、古代イスラエル王の五芒星が日本に伝わっていてもなんらの不思議もないのではなかろうか。

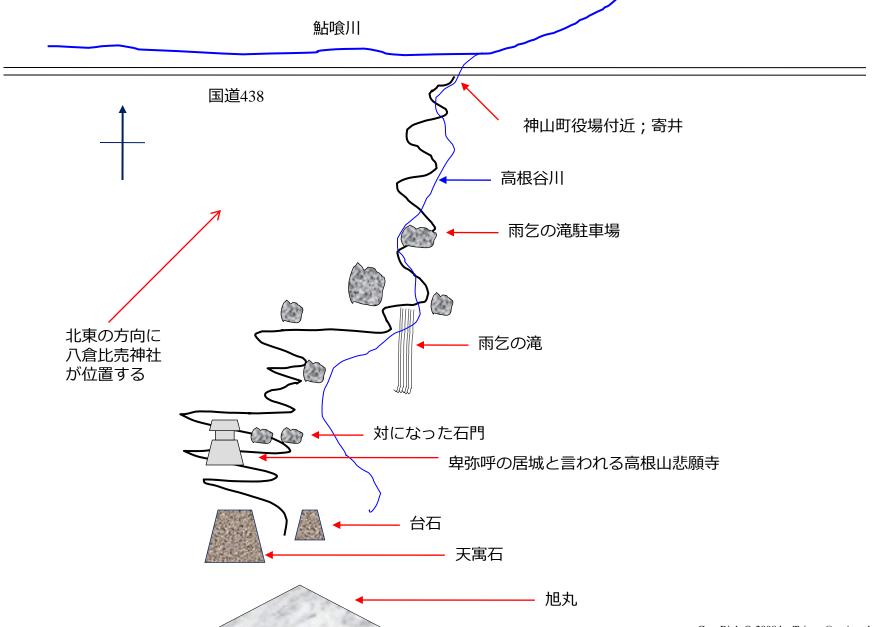
神社略記が明示してしまっている「大日霊女=天照大神」という図式と、阿波邪馬台国説がいう「大日霊女=卑弥呼」という図式が、八倉比売神社の五角形石積みをして…『卑弥呼の墓!』という構図を形成しているのであるが、必ずしも現地で得心がゆくものでもなかった。…た・だ・し…。

杉尾山、気延山にはいくつもの貴人の陵墓があり、その中の最大のものが当時のこの地帯の王か女王の陵墓であろうことは容易に推察できる。この五角形陵の下には非常に高貴な人物が鎮まっている…そういうオーラを参拝してズンと感じたのは事実である。



高根悲願寺(こうねひがんじ) 所在地 徳島県名西郡神山町神領字高根 国道438を寄居から南下、雨乞いの滝方面へ向かう。









国道438の寄井からクルマ1台がやっと通れるような細い道を15分ほど高根谷川沿いを南下する。その終着点が雨乞の滝散策ルートの入り口になっている。 阿波十二勝の一つである雨乞の滝までが約1km、そこからさらに山道を登り、約1kmで高根悲願寺につく。散策ルートには、6つの名瀑がある。 前夜の雨が上がり、ようやく白みかけた早朝、独り悲願寺を目指して歩き始めた。

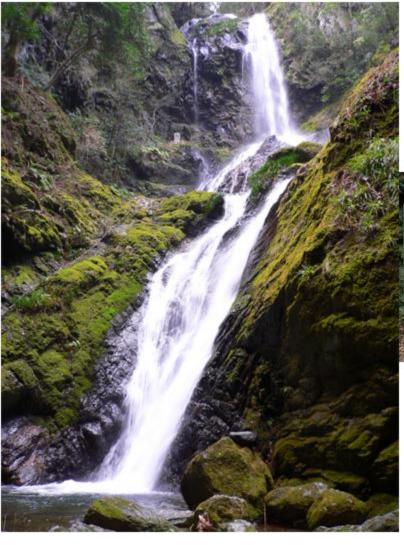


雨乞の滝散策ルートには夥しい巨岩群が顔を出す。最初に出会うのが「うぐいす滝」



不動滝

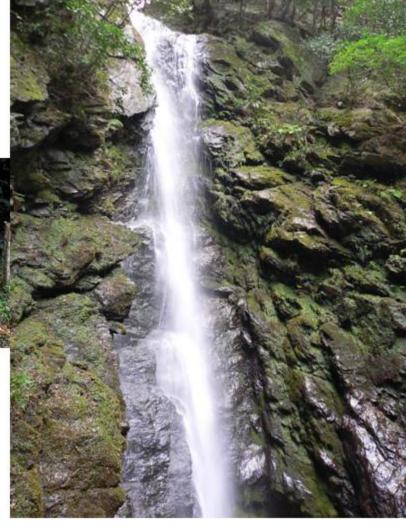




雨乞の滝



雨乞の滝には龍王神と 不動尊が祀られている。



雄滝;左の鎖場と上方の不動尊に留意。

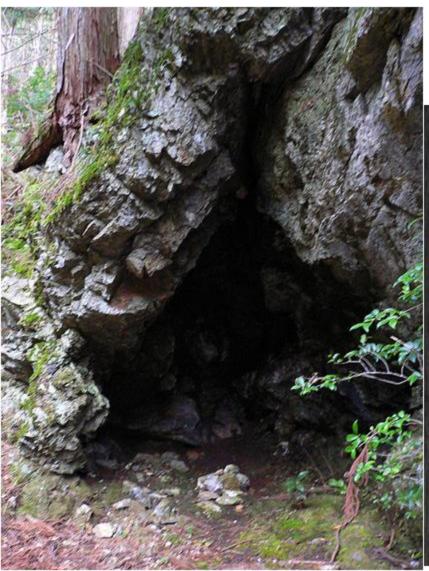
雌滝



石塁;"卑弥呼の山城"と称される一因



天岩戸構造



悲願寺間近の山中にある白い巨岩;表面形状から言えば"鏡石"



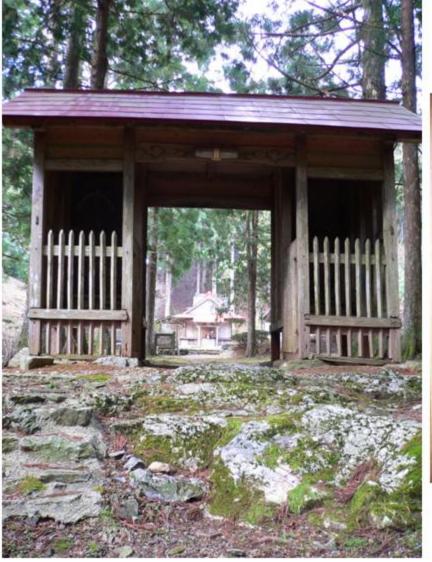


悲願寺近くの石塁

悲願寺山門前の第三石門









高根悲願寺山門





悲願寺があるところは三方を斜面で囲まれた窪地で、やや広めの平坦部になっている。このはるか後方(南側)に 天禺岩、台石がありさらにその奥に旭丸という山がある。ここに何らかの重要な施設があったことは確かであると 考えられるが、"山城の護り"には適していないといえる。"居城"というよりは祭祀機能の一部ではなかろうか。



左;常夜塔 右;悲願寺





悲願寺境内の十二社神社と巨木

境内にある巨石の傘を被った小社



オートキャンプみやま村管理事務所この左にある大きなブランコのところを左奥に登ってゆく。現在案内板は全く無い! ここから携帯で神山町の観光課に直接電話し、それでようやくルートをみつけた。ちなみにこの管理事務所も休眠中のようで荒れ始めていた。

管理事務所の遠方に見えるなだらかな三角山が旭丸…と思われる。



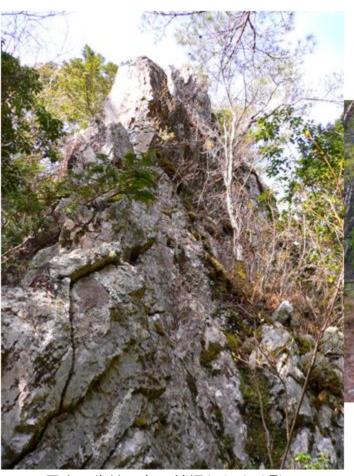
最近訪れる人が少ないせいか、ルートは荒れている。途中の 巨岩群を時計回りに回り込むようにさらに登る。



天禺岩の右サイド。 すり抜けて山頂へ向かう。



天禺岩の全体像。長さ約20m、高さ5m以上はある。巨大な御神体石である。



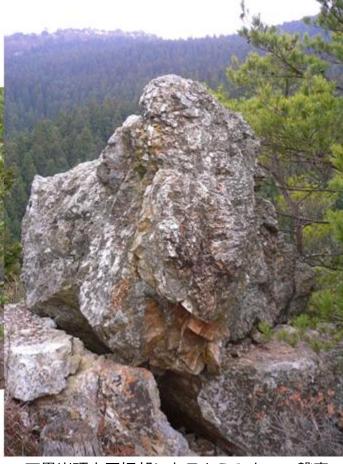
天禺岩の先端。左の鎖場からよじ登る。



天禺岩

天禺岩頂上平坦部にある「天王龍王神社」

小さな社があるが新しすぎて違和感あり。 後方の白い磐座が重要であると思う。 天禺岩のこのあたりから窪地を挟んで対岸部に 「台石」と呼ばれる巨大なサイコロ状の石が見 える。それにしても樹木の繁茂が激しく、古代 にはかなり雄大な見晴らしが得られたことだろ うと惜しく思う次第である。



天禺岩頂上平坦部にあるもうひとつの磐座



高根悲願寺と天禺岩の中間にある巨石。 この領域は"禁足地"的な雰囲気が漂う。 おそらくこの巨石も何らかの古代祭祀 に関わるものであると思われる。 佇まいは極めて良い。



高根悲願寺と天禺岩の中間にある巨木。

雨乞の滝近くの路上に露出した鉄分を 含むと考えられる巨岩。



それにしても…四国の内奥には興味深い遺跡が眠っている!…というのが実感である。実は十代のころから四国には3回ほど訪れているが、今回の4回目にして「初めて四国内奥」に進むことを許されたという感覚を持っている。それまでの3回は空海の封印にはじかれるがごとく、すべて海岸沿いをただ回っただけだった。果たして…鮎喰川を西へ遡る徳島の奥地は、「さりとてはの地」であることは確かであった。

まだ薄暗い3月の早朝6時に徳島市内を出発し、国道438を西進するにつれて朝日が照らし出す鮎喰川流域の豊かな地が、古代に十分に そこに王国が存在していたことを語りかけてくる。

前日の八倉比売神社で感じた気高き五角陵と山のオーラを踏まえるならば、奇しくも"神領"と呼ばれる地域にある高根悲願寺が古代王国になんらかの関係があるであろうことは容易に想像できる。…そんな思いを抱きながら、白みかけた悲願寺への道を歩き始めた。

寄井〜雨乞の滝〜悲願寺〜天禺岩一帯は『卑弥呼の山城』として紹介されている場合が多い。たしかに神領、神山という地名からしても古代王国の何かがあったのであろうことは推察できる。ただし、それが邪馬台国であるのか、また卑弥呼に関連したものであるのかについては手がかりに乏しいといえる。

年代不明の石塁があることや石門があることなどから山城説が出るのも不思議ではないが、少なくとも悲願寺〜天禺岩周辺はむしろ攻めやすく侵入しやすい地形であるので、城としての護りには適していない。また悲願寺間近の石塁はそこに生えている若い杉から考えても年代が比較的新しいと思われる。

それに比べ、ピラミッド山の構造(既に発表の概念構造化説:次ページ)に一致するものが非常に多く、寄井〜悲願寺までのルートが優れてピラミッド山参道になっていたので、逆に驚いたのである。非常によくできたピラミッド山-巨石群構造が形成されている。

また、既に言及してきた「ピラミッド山の概念構造」に照らし合わせて考えるに、渓谷沿いの参道と雨乞の滝は見事にまで昇華された「水と浄化」のシステムであり、雨乞の滝で清めた後に、いくつかの石門を通過して悲願寺という彼の場所へ出るという仕組みは文化度の高いデザイン性を感じるものである。

そういう意味では、参道としての雨乞の滝ルート、拝所としての悲願寺(という地点)、御神体としての天禺岩、祈祷部としての台石という図式が描かれていることになる。そして今回は未踏であるが、背後のピラミッド山として旭丸がある。(あるいは高根山自体がそれに相当するのかもしれないが…)

私としては高根悲願寺一帯は山も含めて「ピラミッド山構造体」を見事に形成していると今回確信した。…ということはその巨大システムを古代王国の賢人達が有効に活用したであろうことはしごく当然であると思われる。そして祭祀に関わる人々がこの地に深く関与したことも事実であるだろう。

古代王国がいわゆる邪馬台国に同定されうるものかどうかは現時点では分からない。(そうであるかもしれない…小生は常に異説に対してはポジティブであり、真実追究姿勢をリスペクトしている)また、王国の女王としての卑弥呼がここに居たとする根拠や感覚も未だ持ち得ないが、巫女としての女王クラスの人が悲願寺周辺や天禺岩周辺で祭祀の活動をしたことは、大いにあり得る話であると思うし、実感的にもそう感じられた。

日本のピラミッド山と巨石の特徴

